

葉がいちじるしく大形であり、無性芽は葉裂片や、まれに花被の先端にも多くみられる。これらの点で他の邦産種からは明らかに区別できる。

**チヂバイチョウウロコゴケ** (服部) *Acrobolbus titibuensis* Hatt. は subgenus *Lophocoleopsis* に属するものであるが、本属の分布の特異性についてはすでに服部博士により再三言及されたところである。本属のもので生殖器の明らかなものは、ヨーロッパの *A. wilsonii* があるが、この種の雄生殖器も明らかでない。Schiffner が subgenus *Lophocoleopsis* を設定した時に与えた生殖器の記載は恐らくニュージーランドから知られている *A. lophocoleopsis* にもとづくものであろうけれども、これが果して本属のものであるかどうか疑問がもたれる。本属に入るものは今日のところではヒマラヤの *A. ciliatus*、北米の *A. rhizophyllus*、日本の *A. titibuensis* 及び先にあげた *A. lophocoleopsis* であるが、今回記載した *A. titibuensis* の雄の生殖器と *A. lophocoleopsis* の雄の生殖器の記載では *Antheridium* の数が異つている。このことは上記した如く *A. lophocoleopsis* が本属に入るか否か疑問がもたれるので今後 *A. lophocoleopsis* の詳細な検討をまつた上で更に考察をすすめたいと考える。

**ムカシヒシヤクゴケ** *Scapania ornithopodioides* (With.) Pears. は尾川・服部両氏 (1955) が subgenus *Protoscapania* を新しく設定した際に日本産の唯一の種としてあげられたが、本種の生殖器が未知のため支那雲南から知られている *S. secunda* が亜属の type に指定された。昨夏十文字峠でイトウトサカゴケと共に採集した本種の中に花被をつけたもの若干をみる事が出来たが *S. secunda* の花被と比較すると口縁部の様子が非常に異つている。即ち本種ではいちじるしく ciliate している上に時に口縁部が裂片に分れる傾向があるが、*S. secunda* では口縁部は不規則に dentate していて裂片に分れるようなことはない。

□ 幾瀬マサ著：日本植物の花粉 (Pollen grains of Japan) pp. xi, 303. Pl. 1-76, ¥ 2,500 広川書店、文京区春木町 (Hirokawa Publishing Co. Harukicho, Bunkyo-ku, Tokyo)

著者の東邦大学における 10 年の努力が実を結んで、殆んど全部生きた植物によつて、約 190 科、2,300 種に及ぶ本邦産及び本邦内栽培植物の花粉が型 (65 種に分けた)、彫紋 (10 種)、大きさの各点で調査された。この中には著者によつて初めて発見された型もある。この部に主力が注がれているが、型による或は大きさによる検索表の作成にも絶大な努力が加えられている。又科別に特長をまとめた部分は系統分類学上の興味が大きい。これと第 1 表科別花粉粒一覧をまとめることが出来たらもつと便利であつたかも知れない。開花暦、採集法、プレパラート製作法、術語の説明、屈折率の表など行きとどいている。材料の植物の鑑定は一流の分類学者によつていたので正確であり、安心して使える。巻末プレート凸版 40 葉、写真版 36 葉は世界の水準を出ている。世界的に花粉学興隆の時に本邦の材料でこの様にまとめたものが出たことは慶賀にたえない。

(Elaborate work on about 2,300 species. Text in Japanese. Tables covering 243 pages are intended to be useful for foreign scientists.) (津山尚)